

子どもが病気にならなくてすむ、といつて お母さんたちが喜ぶ顔。何よりの励みですね。 中村 哲さん なかむら・てつ PMS(ベシャワール会医療サービス)総院長

中村哲さんは、'84年からずっとパキスタンやアフガニスタン辺境で、現地の人びとを診療している医師である。

「ほんの数年のつもりが、もう20年以上、経ってしまいました」

パキスタンの「ベシャワール・ミッシオン病院」からハンセン病治療の要請を受け、家族を福岡に残して単身赴任したのがきっかけだった。当時、ソ連のアフガン侵攻で、アフガニスタンの国民10人にひとりが戦禍で亡くなり、600万人の難民がパキスタンに逃れて来ていた。

医療設備も最悪で、たとえば聴診器は「耳に入れると怪我しそうな」しろもの。習慣の違いにも戸惑った。

「とくに女性は、肌を見せてはいけなから、聴診器も服の上から。触診な

なんてとても。やがて日本から女性の看護師がきてくれたが、万事そんな調子でした」

治安も悪く、薬を運ぶジープが強盗たちに襲われたこともある。

首に銃口を突きつけられ、車のキーか命か、と脅された運転手が振り返って、中村さんに「どうしましょ?」。

そんなこと聞くな、と全員でホールドアップ、隣の村まで半日かけてブツブツ言いながら歩いた。が、アフガンは

血縁社会。犯人の顔もすぐ割れるし、クルマを売る場所も決まっている。1年後には、ぼろぼろになったジープを

取り返し、犯人たちもつかまった。「犯人たちはわれわれの報復を恐れて、ずっと家に隠れていたんです。でも病

気になって、しかたなくうちの診療所に来たりして(笑)」

これは笑い話ですんだが、生命は常に危険にさらされていた。

けれども、国際社会から見向きもされないアフガン難民たちと接するうちに、中村さんの覚悟は決まってくる。

「誰も行きたがらない所で、誰もがやりたがらないことをやる」

中村さんがやりたいこ

とを実行に移せたのは、彼の医療活動を支える「ベシャワール会」の存在も大きかった。会はアフガニスタン山岳部の無医村でも、4つの診療所の運営に乗り出した。

だが、中村さんを待っていたのは、病気だけではなかった。

薬よりもまず、清潔な水を。
中村さん、井戸を掘る。

2000年夏、未曾有の大干魃で農地がカラカラに干上がり、飲料水がなくなつた。汚い水を飲んだ子どもたちが赤痢で次々と死んでいく。薬など、いくらあっても足りない。猛威をふるう自然の前で、なすすべもなかった。「病気はあとで治せばいい。まずは水の確保。それから食料だ」

井戸を掘り、以前からあった地下水路(カレーズ)を修理。2003年にはベシャワール会に寄せられた募金10億円を投じ、川から用水路を引く灌漑を始めた。現地の人を雇い入れて自らも「土木作業員」となり、慣れない手つきで重機を操縦した。

ここでは昔の日本の農業土木が役だった。針金でつくった籠に石を詰めた「蛇籠」もそのひとつ。アフガンでは石は無尽蔵にあり、蛇籠はコンクリートと違ってメンテナンスもラクなのだ。井戸掘りのさなかの2001年10月。



中村さんの活動を支援するNGOベシャワール会会員は現在、約1万2500人。アフガン空爆時には緊急食料援助も。中村さんは年に数回帰国し、現地の状況を報告、講演もこなす。

アメリカは9・11テロ事件の報復として、アフガンを空爆した。「ときのタリバン政権はテロの巣窟などと言われたが、9・11の実行犯にアフガン人はいなかった。なのに報復だといつて、罪のない飢え死にしそうな人たちが攻撃されたんです。『爆弾を落とすより、ビスケットを撒いてくれんか』と空をにらんだ。思い出すと、今でも血圧が上がりますよ」

アフガン攻撃は一般市民に何万人もの犠牲者を出した。その後、世界中のマスコミは、現地に自由と民主主義が訪れたかのように報じているが。「むしろ、その逆です。新政権になって、治安はタリバン政権の頃より、ずっと悪くなりました」

4つあった診療所の2つも、安全が確保できないという理由で、やむなく現地行政に譲渡。ごく最近のことだ。



通水の堰が切れ、ひたひたと満ちてくる水に子どもたちの歓声が。用水路は完成すると全長14kmになる。「医者を100人連れて来より、1本の水路です」。コンクリートを使わず、現地の人でもメンテナンス可能な「蛇籠」による護岸工事は環境にもいい。土手には柳や桑を植える。



アフガンは農業国で9割以上が農村部。小麦、とうもろこし、ぶどうも実る。この清らかな水が人々の命と村を蘇らせる。



ハンセン病を中心に、マラリア、赤痢などの患者も診療。医療も支援も、心がけるのは相手の立場に立つこと。

アフガン空爆を日本が支持して以来、それまで日本人に好意的だった現地の人々の目も、変わってしまったという。「これで憲法9条を変えて欧米と同じ軍事活動をしたら、これからは日本人であるがゆえに狙われ、命を落とすようになると思います」

持つべきもの、持つべきでないものがアフガンに在るとよくわかる。

アフガニスタンの女たちはブルカをかぶられ虐げられている。そのような誤解に、中村さんは首を横に振る。「女性たちは、家の中では実権を握っていることが多いんです。工事をしていると、子どもが『お母さんから』とお茶を届けてくれる。彼女らの支持が得られたら怖いものなしですよ。男は家では頭があらがないですからね」

水路ができて喜んだのは、苦勞して遠くまで泥水を汲みに行き、上澄みをすくって料理していた女性たちだった。「母親たちから、『これで子どもが病気になるなくてすむわ』と言われたのが、何よりうれしかった」

病気で子どもを失う母親の気持ち、中村さんには痛いほどわかる。アフガン空爆のさなか、福岡に残してきた9歳の次男が悪性脳腫瘍を発病、1年半後に亡くなったのだ。

「ぼくは脳外科医でもありますから、わかるんですよ。あと少ししか生きられない、と。息子をもっともつと、遊

びに連れて行ってやりたかった」水路をつくることで子どもたちの命が助かるなら、なんとしてでも。

現地に溶け込み、貧しく暮らし、生活費を得るために福岡の病院へ年に1か月半、出稼ぎに行く。なぜ、そこまでして現地の支援を？

「逃げ足が遅かったですね。こんなに長くなった。土木作業も楽しい。という語弊があるかもしれないけど」

来たばかりの頃は、人助けしたい、との意気込みが少なからずあった。

「思い上がりでした。助けられたのは自分だと、最近わかってきましたね」

何を持ち、何を持たずに生きるべきか。一番大事なことを教えられた。

「持つべきものは、いつも相手の立場を思いやる気持ち。持たざるべきものは、お金や地位への執着。軍隊や武器もそう。ぼくは憲法9条がなくなったから日本国籍を捨てようと、本気で考えていますよ」



九州男児の熱い血が流れる、中村さん。「昔はケンカっ早かったけれど、いまは現地でなだめ役です」。『医者井戸を掘る』(石風社)他、著書多数。

誰もが行きたがらない所へ行き、誰もがやりたがらないことをする。いつも現地の人たちの立場で。